

農 作 概 況

〔水 稲〕

1. 作付の概況

九州における平成8年産の水稻作付面積は238,600haで、前年に比べて18,100ha(7%)減少した。品種別の作付状況を見ると、ヒノヒカリの作付がさらに増加し、九州の作付面積の48.7%(前年は40.4%)となり、次いでコシヒカリが17.0%(前年は15.3%)を占め、両品種で約66%(前年は56%)の作付面積割合となった。

2. 作柄の概況

九州における平成8年産水稻の収穫量は1,194,000tで、前年に比べて116,000t(9%)減少した。これは、前年に比べて作付面積が減少し、10a当たり収量も10kg(2%)減少したためである。

九州平均の作柄は、作況指数104の「やや良」で、10a当たり収量は500kgとなった。県別の作況指数は、長崎県が107の「良」で、佐賀県が105、福岡県・熊本県・大分県および鹿児島県が104、宮崎県が103の「やや良」であった。

3. 生育概況

1) 普通期水稻

田植期は、前作の小麦の収穫が遅れたためにやや遅くなった地域もあったが、おおむね平年並みであった。7月初旬まで寡照に経過したことから初期生育はやや遅れたが、その後は高温・多照の好天で経過し、出穂期は平年に比べて2~5日程度早かった。

生育については、田植後の寡照により分けつの発生が遅れ、初期の茎数は少なく軟弱な生育で経過したが、7月中旬から8月上旬の高温・多照により生育は回復し、茎数は平年並みで、穂数もほぼ平年並みに確保された。1穂当たり初数は平年並みないしやや少なく、1m²当たり初数は平年並みないしやや多くなった。

登熟については、ヒノヒカリ等の中生品種の登熟初・中期に当たる9月上旬から9月下旬前半までが多照に経過したことおよび気象被害・病虫害が少なかったことから、稔実および粒の肥大・充実が良好で、1m²当たり初数が同程度であった他年次に比べて登熟歩合、千粒重ともに大きい傾向にあった。品質についても、乳白粒・心白粒の発生は少なく、未熟粒・死米の混入も少なく良好で、上位等級比率は前年に比べて大幅に上昇した。

2) 早期水稻

宮崎県および鹿児島県の主産県の作柄は、作況指数97の「やや不良」であった。

生育概況を見ると、田植期はほぼ平年並みであったが、田植後の4月が低温に経過し初期分けつが緩慢であ

た。その後、5月の好天で分けつが促進され茎数はやや多くなったものの弱小茎が多くなった。出穂期はほぼ平年並みで、穂数は平年並みないしやや多く、1m²当たり全初数も平年並みないしやや多くなった。登熟は、出穂後から登熟初期にかけての降雨による日照不足や低温、さらには台風6号による倒伏や葉の損傷のため不良となった。また、粒の充実も劣り、青未熟粒・乳白粒・心白粒の発生が多く、品質の低下が極めて大きかった。

4. 被害の概況

被害総量は78,800tで、被害率は6.9%と平年を5.8ポイント下回った。

被害種類別にみると、気象被害については、早期水稻を中心に台風6号、12号による倒伏や初摺れ、葉の裂傷等がみられたが、被害率は2.4%と平年を3.7ポイン

1996年産水稻の収穫量および被害程度

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	作況 指数	前年との比較						
					作付面積		10a当 り収量		収穫量		
					対差	対比	対差	対比	対差	対比	
	ha	kg	t		ha %	kg %	t %				
九州計	238,600	500	1,194,000	104	△18,100	93	△10	98	△116,000	91	
福岡	48,500	509	246,900	104	△4,800	91	4	101	△22,300	92	
佐賀	34,800	546	190,000	105	△2,900	92	11	102	△11,700	94	
長崎	17,600	468	82,400	107	△1,200	94	1	100	△5,400	94	
熊本	49,200	512	251,900	104	△3,200	94	△10	98	△21,600	92	
大分	30,800	492	151,500	104	△2,500	92	△27	95	△21,300	88	
宮崎	26,300	468	123,100	103	△1,800	94	△45	91	△21,100	85	
鹿児島	31,300	472	147,700	104	△1,900	94	△11	98	△12,700	92	

区 分	総合	気象被害			病 害		虫害
		風水害			いもち病		
	%	%	%	%	%	%	
九州計	本年	6.9	2.4	2.0	3.2	1.8	1.1
	対平年差	△5.8	△3.7	△1.3	△1.4	△0.5	△0.7
福岡	本年	4.4	1.2	1.2	2.2	1.2	0.7
	対平年差	△6.6	△4.9	△1.6	△1.3	△0.4	△0.5
佐賀	本年	4.2	1.0	0.8	2.2	0.8	0.8
	対平年差	△9.6	△6.5	△2.7	△2.6	△0.9	△0.6
長崎	本年	5.2	2.3	2.1	1.2	0.5	1.5
	対平年差	△9.7	△6.1	△3.3	△3.1	△1.5	△0.6
熊本	本年	6.0	3.4	2.3	1.8	1.0	0.7
	対平年差	△4.7	△1.9	△0.3	△1.9	△0.9	△0.9
大分	本年	5.2	0.7	0.7	3.5	2.6	0.7
	対平年差	△6.7	△5.4	△2.3	△0.8	△0.4	△0.7
宮崎	本年	14.1	4.5	4.5	7.5	4.9	1.8
	対平年差	△0.9	△0.6	1.0	0.0	0.7	△0.6
鹿児島	本年	12.7	4.9	3.9	5.3	2.6	2.2
	対平年差	△2.9	△0.3	△0.2	△1.2	△0.1	△1.5

注) a) 資料:「農林水産統計速報8-63(生・流-24)」九州農政局統計情報部。

b) △印は「少ない」を示す。

c) 対平年差は、被害率の差をポイントで示したものである。

ト下回った。

病害については、被害率は3.2%で平年に比べて1.4ポイント下回った。このうち、いもち病は被害率1.8%で平年を0.5ポイント下回った。虫害については、全国的に中山間地を中心にカメムシ類の食害が見られたものの被害率は1.1%と平年を0.7ポイント下回った。

以上のように本年は、台風による気象被害、病虫害ともに平年に比べて少なく、被害が軽微な年であった。

(九州農業試験場水田利用部)

[麦 類]

1. 作付の概要

九州における1995年産の麦類の作付面積は46,300haで、前年に比べて5%の減少となった。麦種別では、小麦が24,864ha、二条大麦20,662ha、裸麦774haで、前年より小麦が1,064ha(4%)、裸麦が108ha(16%)増加したが、二条大麦は3,638ha(15%)減少した。これは前年と同様の傾向であり、ビール麦の契約枠減少に伴う麦種転換が影響しているものと考えられる。全国の作付面積に占める九州地域の割合は小麦が16%でほぼ前年並み、二条大麦が微減の45%、裸麦が微増の19%となった。

県別では、小麦が福岡、佐賀、熊本、大分の4県で1~11%増加し、裸麦は福岡、佐賀、長崎、大分の4県で前年に続いて増加している。これに対して、二条大麦は各県とも20%減少し、特に主産地の佐賀県では前年より2,200haと大きな減少となった。長崎、鹿児島両県ではいずれの麦種とも作付面積の減少が続いている。

1996年産麦類の作付面積と収穫量

麦種	作付面積	10a当たり収量	収穫量	作況指数	前年との比較					
					作付面積		10a当たり収量		収穫量	
					対比	対差	対比	対比	対差	
	ha	kg	t		%	ha	%	%	t	
小麦	全国	158,500	302	478,100	80	105	6,900	103	108	34,500
	福岡	12,300	362	44,500	111	102	200	101	103	1,200
	佐賀	6,660	156	10,400	49	111	680	38	42	△14,400
	長崎	742	315	2,340	115	96	△28	94	90	△250
	熊本	3,160	332	10,500	124	101	40	103	105	500
	大分	1,920	393	7,550	124	105	100	100	106	400
	宮崎	49	266	130	—	79	△13	97	77	△39
	鹿児島	33	258	85	—	92	△3	113	104	3
二条大麦	全国	46,100	411	189,600	115	90	△5,200	110	104	8,000
	福岡	4,150	379	15,700	116	81	△960	108	87	△2,300
	佐賀	12,800	387	49,500	116	85	△2,200	110	94	△3,300
	長崎	873	400	3,490	132	86	△137	104	90	△380
	熊本	1,930	344	6,640	115	93	△140	104	97	△270
	大分	475	361	1,720	—	79	△127	99	78	△480
	宮崎	111	315	3,500	—	73	△41	105	77	△106
	鹿児島	323	312	1,010	—	83	△68	113	94	△70
裸麦	全国	4,040	438	17,700	130	106	240	122	130	4,100
	福岡	185	436	807	—	243	109	126	307	544
	佐賀	58	359	208	—	322	40	120	385	154
	長崎	271	355	962	—	111	26	109	120	161
	熊本	64	370	237	—	79	△17	126	100	0
	大分	377	356	1,340	—	157	137	103	161	510
	宮崎	2	228	5	—	100	0	91	100	0
	鹿児島	2	250	5	—	50	△2	111	56	△4

注) a) △は減少を示す。

b) 資料は「農林水産統計速報8-233 平成8年産4麦(出細別)の収穫量」(農林水産省統計情報部)。

2. 生育概況

播種期から3月までは低温・少雨傾向で推移したため、平年に比べて生育は遅れ気味となった。さらに、4月上旬～中旬の気温が平年を大幅に下回り、出穂期は平年より10～14日遅くなった。その後は好天に恵まれ、登熟は順調に進んだが、出穂期が遅れた影響で成熟期は平年より7～10日遅れた。二条大麦と裸麦の収穫はほぼ順調に行われたが、小麦では収穫期が梅雨入りと重なったため早生品種を中心に穂発芽の被害が多発した。

3. 作柄の概要

10a当たり収量は、小麦が福岡、長崎、熊本、大分の各県で315～393kgと平年を上回ったが、佐賀県では作付面積のほとんどを占めるシロガネコムギが穂発芽による大被害を受け、作況指数は49となった。その他の県でも収穫期の雨害のため上位等級比率は低下した。二条大麦と裸麦の10a当たり収量は南九州を除いて344～436kgと高く、ほとんどの県で前年を上回った。九州全体での収穫量は、小麦75,500トン、二条大麦78,410トン、裸麦3,560トンで、前年に比較して小麦が14%、二条大麦が8%それぞれ減少したのに対し、裸麦は62%増加した。

(九州農業試験場水田利用部)

〔カンショ〕

1. 作付の概況

本年の全国のカンショの作付面積は47,500haで前年の約4%減であり、10a当たり収量もやや減少したため収穫量は6%減り、1,109千tになった。鹿児島、宮崎など九州7県の作付面積は前年の95%と全国と比べ減少率がやや大きく、依然として漸減傾向が続いており、澱粉原料用カンショの作付が最大である鹿児島における面積の減少が強く影響している。今後、澱粉原料用カンショはもちろんのこと、WTO 勧告により税率の強化が決定的となった焼酎の原料用カンショの動向も注目される。

1996年度カンショ作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当		作況指数	前年との対比				
		たり収量	り収量		作付面積		り収量		
					対差	対比	対差	対比	
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	
全 国	47,500	2,300	1,109,000	103	△1,900	96	97	△72,000	94
福 岡	326	1,590	5,180	104	4	101	—	—	—
佐 賀	170	2,010	3,420	103	△10	94	—	—	—
長 崎	1,140	2,090	23,800	103	△40	97	95	△2,200	92
熊 本	1,400	2,400	33,600	104	10	101	96	△1,300	96
宮 崎	2,730	2,370	64,700	98	△170	94	89	△12,400	84
鹿児島	14,600	2,610	381,100	96	△900	94	91	△62,200	86
沖 縄	363	1,850	6,720	86	△45	89	—	—	—

注) a) △印は減少を表す。

b) 資料は農林水産省統計情報部農林水産統計速報8-272(生産-61)(平成8年12月16日公表)による。

2. 作柄の概況

本年は挿苗期の少雨の影響で活着はやや不良となり、さらに初夏には多雨・日照不足に遭遇したため初期生育が抑制された。しかし、夏以降は高温・多照に推移したことから、生育は平年並みに持直した。着いも数は鹿児島県でやや少なく、その他の県では平年並みであった。いもの肥大は初期生育の遅れから早掘栽培ではやや不良であったが、他の作型では平年並みであった。このことから九州の作柄は昨年より悪く、97のやや不良であった。また沖縄では少雨の影響により、いもの肥大が悪く、作況指数86の不良となった。

(九州農業試験場畑地利用部)

〔大 豆〕

1. 作付の概況

本年度の大豆作付面積は全国では81,800haであり、前年より13,200ha増加した(前年比119%)。九州では12,664haで前年比138%と大きく増加した。県別に見ると福岡、佐賀、大分および熊本の4県で増反が大きく、他の3県では前年同またはわずかながら増加した。作付の増加要因は前年に引き続き水稻の生産調整面積が増加したことにより、水田において大豆の作付が大幅に増加したことが主な要因であると見られる。

2. 作柄の概況

播種期が早い中山間部では6月上旬～中旬に多雨に経過し、出芽および初期生育がやや遅れた地域がみられた。平坦部における大豆の生育期間にあたる7月上旬以降は高温多照に経過したため、生育は順調に進んだ。開花結実期間も順調に経過したため、着莢および子実の肥大は良好であった。しかし一部地域ではカメムシによる子実の被害や、ハスモンヨトウによる地上部の食害が発生した。また北部九州では8月12日に通過した台風12号の

1996年度大豆作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当		作況指数	前年との対比			
		たり収量	り収量		作付面積		り収量	
					対差	対比	対差	対比
	ha	kg	t	ha	%	t	%	
全 国	81,800	180	147,600	100	13,200	119	28,600	124
九 州	12,664	218	27,608	121	3,524	138	8,141	142
福 岡	3,290	245	8,060	133	1,160	154	3,070	162
佐 賀	3,650	227	8,290	129	1,480	168	3,540	175
長 崎	640	180	1,150	115	37	106	0	100
熊 本	2,350	222	5,220	108	340	117	700	115
大 分	1,920	181	3,480	111	510	136	840	132
宮 崎	523	167	873	98	2	100	△23	97
鹿児島	291	184	535	99	△5	98	14	103
沖 縄	—	—	—	—	—	—	—	—

注) a) △印は減少を示す。

b) 資料は農林水産省統計速報8-276(生産-64)(平成8年12月20日公表)による。

強風によって倒伏害および葉焼病が発生したことにより減収した所が見られた。

全国平均の作況指数は104とやや良であった。九州では一部地域を除いて、全生育期間を通じておおむね良好な天候に恵まれたことから、作況指数121(全国でも最も高い良好な作況)と昨年に続いて良好な作柄となった。

10a当たり収量は全国の180kgに対し、九州では218kgであり、全国平均を38kg上回った。収穫量は作付面積の増加と高収量の相乗効果によって、前年より約8,100tと飛躍的に増加した。

(九州農業試験場作物開発部)

〔野 菜〕

1. 年間の概況

前年暮れに引き続き年明けから3月まではやや低温～平年並みの気温で経過した。4月はやや低温傾向が続き桜の開花期が異常に長かった。佐賀では1～4月は平年より低温、大分では1～3月までは旬によりやや差異があるが平年並みの気温とやや少ない降水量であった。イチゴ、トマト、キュウリ等で生育が遅延気味で収穫が遅れた。5月22日には佐賀から筑後地方の狭い範囲ではあるが降雹があり施設、露地野菜ともに被害を受けた。入梅は6月上旬の後期で梅雨明けは7月中旬前半であった。台風6号が7月18日～19日にかけて鹿児島・宮崎・大分を通過し大分では根深ネギ、トマト、ピーマン等で被害が発生した。8月中旬は台風12号が宮崎を襲った。中旬までは平年並みの気温であったが、平場では以降は9月上旬までは高めに経過しイチゴの炭そ病が多発した。夏秋野菜の生育はおおむね順調であったが、O-157でレタス、キャベツ、カイワレダイコン、トマト等の生食野菜は大打撃を受けた。10月下旬から11月上旬は高温に経過したため、ハクサイで病害が発生し、イチゴが小玉で強酸味となった。中山間地で早い降雪があり、ハウスが倒壊した。

沖縄では全般的に降雨量が少なく、台風の襲来が多い厳しい年であったため、インゲンでは乾燥のため落莢、発芽不良、生育遅れが出た。

2. 冬春作

イチゴは低温により着色・収穫遅延があったが株疲れやうどん粉病も少なく品質的に充実し収穫期間の延長により予想以上の良結果であった。促成のキュウリ、トマト、ピーマン、春作メロン等で低温による草勢低下、成熟遅れ、着色遅延、灰色かび病により減収した。ナスでは低温の影響は少なかったが一部でススカビ、灰色カビによりやや減収した。アスパラガス、キャベツ、ゴボウ、グリーンピース等の無加温ハウス、トンネル、露地栽培でも生育遅延が見られ一部で減収したが、多くは平年並みであった。トンネルメロンでは着果不良が発生した。ハモグリバエ、スリップスが多発した。

3. 春夏作

一部雨よけピーマンで定植後霜害が発生した。アスパラガスでは4月の低温により立茎が遅れ減収した。ホウレンソウ、レタス等でも同様となった。5月になり低温の影響も回復したが、トマトではチャック果や窓あき果が、メロン、トマトでは糖度低下、着果不安定、肥大不足が、タマネギでも肥大不足、品質・収量低下が発生し、総じてやや不作傾向となった。沖縄では前半は降雨量が比較的多く低温傾向であったため順調であったが後半は乾燥傾向で葉菜類を中心に生育が停滞した。

〔さとうきび〕

1. 作付の概要

1995/96 さとうきび年期の収穫面積は、鹿児島県が9,369ha、沖縄県が14,693haと前年に比べそれぞれ97.3%、97.2%と減少した。鹿児島県下は奄美大島地域で増加したが、他の地域は3～4%減少した。沖縄県では八重山地域の減少が大きかった(89.3%)。作型別では、春植および株出が減少し、構成比は春植13.9%、夏植36.9%、株出49.1%となった。NiF8の普及が沖縄県にも進み、品種の交替はいつそう進んでいる。分蜜糖製造は種子島、沖永良部(95.12.11)で始まり、宮古島で終了した(96.4.25)。

2. 作柄の概況

鹿児島県下の10a当たり収量は種子島が低下、喜界島、奄美大島、与論島は上昇、徳之島、沖永良部は昨年並みであった。品質は昨年並みで、甘蔗糖度は県平均で14.2%、12.8%以下の原料は昨年より増加し、全体の13.4%であった。沖縄県の10a当たり収量は昨年より高く、宮古、八重山両地域は大幅に上昇した。品質も良好で、甘蔗糖度の県平均は14.3%、12.8%以下の原料も12.9%と昨年の38.2%に比べ大幅に減少した。両県の生産実績は表の通りである。{} 数字は前年比%

(九州農業試験場作物開発部)

1995/96年期の沖縄、鹿児島両県のさとうきび生産実績

県別	年次	農家戸数(戸)	収穫面積(ha)	10a当収量(t)	収穫量(t)	産糖量*(t)	分蜜糖歩留り(%)
鹿児島	95/96	12,086	9,369	6,487	607,803	73,577	12.11
	94/95	12,435	9,626	6,485	624,218	78,504	12.58
	前年比 (%)	97.2	97.3	100	97.4	93.7	96.3
沖縄	95/96	23,305	14,693	6,896	1,013,245	127,203	12.44
	94/95	24,725	15,135	6,455	977,004	111,963	11.37
	前年比	94.3	97.1	106.8	103.7	113.6	109.4
両県計	95/96	35,391	24,062	6,737	1,621,048	200,780	12.32
	94/95	37,160	24,761	6,467	1,601,222	190,467	11.86
	前年比	95.2	97.2	104.2	101.2	105.4	103.9

注) a) * : 分蜜糖を含む生産量。

b) さとうきびおよび甘ん糖生産実績(鹿児島県、沖縄県)より編集。

4. 夏秋作

台風の影響が宮崎、大分、熊本の中山間を中心にかなり発生し、根深ネギ、ハクサイ、ダイコン、キャベツ、キュウリ、トマト、ピーマン、メロン等で強風による被害の他に褐斑病、ウイルスによる急性萎ちょう、うどん粉病、ベト病、軟腐病、ハスモンヨトウ、ウリノメイガ、ハモグリバエ等の病害虫が多発したが、果樹で大発生したチャバネアオカメムシがピーマンでも発生した。レンコン、サトイモでは減収は免れた。北部九州や平地では比較的順調に経過し、定植後の施設果菜類の生育も順調であったが、イチゴ苗の炭そ病害は大きかった。沖縄では少雨・台風によりニンジン、インゲン、葉菜類で被害が大きかった。

5. 秋冬作

イチゴでは第一花房の分化は順調であったが、奇形果の発生がみられ、第二花房は乱れる傾向があった。定植後も炭そ病の被害が連続した。ウリ科、ナス科の施設ものは宮崎・鹿児島両県では夏秋の後遺症により病害虫の劇発により抑制作型の早期切り上げに至ったほどであったし、ハクサイ、キャベツでは軟弱徒長気味となったが、大分、熊本、長崎、佐賀等の中部以北では特に後期には全県的に生育、着果、果実肥大ともに良く、品質・収量ともに優れた。レタス、キャベツ、ハクサイ等では順調な生育を示し、病害虫の発生も少なかったが、12月2日の降雪によりホウレンソウ、パセリ等に被害が出た。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

〔果 樹〕

1. 常緑果樹

1) 温州ミカン

4月上中旬の低温のため、発芽は平年より10～15日遅れ、開花期も7～10日程度遅かった。着花量は極早生温州が平年並み～やや少、早生温州やや少、普通温州も少、特に高糖系温州は極少であった。収量もまた着花量に比例して全体的に減少し、特に普通温州は前年比60～70%の大不作であった。この原因としては、前年、着果量が多かったうえに晩秋～初冬の高温により着色が遅れ収穫が遅延したため樹体に負担が及んだこと、冬季の低温と乾燥により落葉したこと、さらに生理落果期にカメムシが大発生し落果が助長されたこと等があげられる。

果実肥大は平年並みで、着色および成熟期は開花期が遅かったにも拘わらず、梅雨期以降の好天のため平年並み～やや遅れた程度であった。果実の外観はおおむね平年並みで、鹿児島県など台風の影響を受けた地域では不良となった。糖度は北部九州では平年並み、九州中・南部ではやや低く、減酸は福岡県や大分県では早い傾向にあったが、全体的に平年並み～やや遅れた。そのため、

食味は全体的に平年並みで、南九州では不良となった。沖縄県では減酸良好で糖度が高く食味良好であった。浮き皮やヤケなどの生理障害はほとんど発生しなかったが、開花期が遅れたため腰高果が目立った。

各種病害の発生はいずれも平年並み～やや少であった。一方、虫害ではカメムシが開花期～8月に大発生し、特に生理落果期の異常発生により効果の落果が助長させた。また8～11月にはハダニの発生が多かった。さらに佐賀県ではサビダニ、長崎県ではスリップスの発生がやや多かった。その他、九州全域に12月からヒヨドリを主とする鳥害が認められた。

2) 中晩生カンキツ

いずれも温州ミカンと同様に発芽および開花期が春期低温のため遅れた。収量はイヨカンおよび甘夏では平年並み～やや多かったが、ボンカンはやや不作、タンカンは大不作であった。イヨカンは果実肥大、着色、外観、成熟期、糖度、減酸、食味ともに平年並みであったが、甘夏では着色および収穫期が遅れ低糖度で減酸が遅く食味はやや不良であった。ボンカンは着色および収穫期ともにやや遅れたが、肥大および果実品質は平年並みであった。タンカンは果実肥大が良好で品質および食味ともに平年並みであった。病害虫の発生状況は、温州ミカンでの状況とほぼ同様であった。

3) その他

ビワの着花量および果実肥大は平年並みであったが、開花期、着色、収穫期はいずれもやや遅れた。長崎県では糖度がやや低く食味も不良で品質的に劣った。ハウス栽培の後半においてシナビ果や着色不良果等の生理障害が一部地域でみられた。

バインアップルは果実肥大がやや劣り、成熟期も遅れ、やや不作であったが、糖度が高く果実品質は良好であった。病害の発生は平年並みであった。

マンゴーは生育・肥大ともに平年並みであったが、収量はやや多かった。成熟期は10日ほど早かったものの、果皮色がやや淡く糖度も1～3度低下して食味はやや劣った。日焼け果の発生が多かった。

2. 落葉果樹

1) ナシ

4月上中旬の低温のため、発芽・開花期ともに5～8日遅れた。成熟期は九州北部で平年並み～やや早く、九州中部は3～4日遅れ、九州南部では10日程度遅れた。九州北部は成熟前の高温により熟期が早まったようである。着花量は平年並み～やや多で、九州北部ではやや豊作～平年並み、九州中部はやや少、九州南部では少の収量であった。九州中・南部での収量減は肥大不良と台風による落果のためである。果実品質および食味とも全般に平年並みであった。病害の発生は平年並み～やや少なく、虫害ではカメムシが異常発生したものの、薬剤防除の徹底により被害は全般に比較的軽かった。9月以降ハダニの発生がやや多かった。

2) ブドウ

4月の低温のため、発芽は7日程度、開花期は3～5日それぞれ遅れた。成熟期は福岡県では平年よりやや早かったが、他の県は3～7日遅かった。果実肥大および収量は平年並み～やや不良、果実品質も平年並みであった。これは梅雨以降から収穫期まで好天に恵まれたためである。病虫害の発生は、全般に平年並み～少で、褐斑病が佐賀県や大分県でやや多、カメムシの異常発生をみたが実害はほとんどなかった。

3) その他

モモは発芽、開花および成熟期ともに遅れたが、着花量、収量および果実品質は平年並みであった。全域でカメムシが大発生したものの被害はほとんどなく、その他の病虫害は長崎県と大分県でやや多かった以外はおおむね平年並みであった。

カキは発芽、開花、成熟期ともに遅れた。着花量および果実肥大は平年並みであったが、収量はやや少なかった。糖度が高く食味は良好であったが、6～8月のカメムシの異常発生により外観はやや劣った。

キウイフルーツは成熟期がやや遅れ、収量はやや少なく、果実品質も平年並み～劣った。カメムシが大発生したが実害は比較的少なかった。鳥害はかなり多かった。クリは果実肥大が劣り、成熟期も遅れ収量もやや少なかったが、食味は平年並み～やや良好であった。

スモモおよびウメはカメムシの大発生などが原因して収量が少なかった。

(果樹試験場カンキツ部口之津)

〔 茶 〕

1. 一番茶

本年は冬の寒さが厳しく、九州南部では部分的に冬芽に凍害が発生した。3月中旬以降はほぼ平年並に回復したが4月は強い寒波のため上旬および中旬には局所的に晩霜害に見舞われた。萌芽期は九州南部では3月下旬の気温が安定していたためほぼ平年並みであったが、九州中・北部では4月の低温のためやや遅れた。摘採期は萌芽後の低温により開葉速度の遅延から九州各県とも平年より5～10日遅れた。

収量は低温により新芽の生育期間が長くなったことから平年並みかやや増収になったところが多かった。

病虫害の発生は一般に少なかったが、地域によってはクワシロカイガラムシの被害により減収し、品質を落としたところも見られた。

2. 二番茶

二番茶摘採期に当たる6月は降水日数、降水量とも平年に比べて多く、このため一部の地域では雨間に摘採したため若摘みしたところもあったが、摘採期は全体的に一番茶の遅れから平年よりやや遅れ気味であった。

第1表 主要茶産地の摘採期および10a当たり収量

産地名	年次	一番茶		二番茶		三番茶	
		摘採期 月.日	収量 kg	摘採期 月.日	収量 kg	摘採期 月.日	収量 kg
大 隅	本年	5.3	685	6.13	519	7.17	354
	前年	4.26	349	6.12	552	7.18	440
	平年	4.25	535	6.10	561	7.17	348
知 覧	本年	5.2	559	6.17	514	7.22	321
	前年	5.2	662	6.16	424	7.21	349
	平年	4.27	641	6.12	452	7.17	409
川 南	本年	5.6	771	—	—	—	—
	前年	5.1	624	6.13	482	7.22	383
	平年	5.28	550	6.11	540	7.20	434
八 女	本年	5.15	417	6.28	325	—	—
	前年	5.15	501	7.5	553	—	—
	平年	5.7	470	6.28	485	—	—
東彼杵	本年	5.13	714	6.24	526	7.29	360
	前年	5.15	726	6.29	419	7.31	361
	平年	5.7	544	6.24	454	7.28	313
嬉 野	本年	5.15	603	6.25	505	—	—
	前年	5.16	578	6.28	351	—	—
	平年	5.4	552	6.19	425	—	—

収量は早摘みした一部の地域を除き、平年並みかやや増収した。

病虫害の発生は、害虫ではチャノキイロアザミウマ、チャノホソガ、カンザワハダニが、病害では炭そ病、輪斑病が散見されたが被害は小さかった。

3. 三番茶

南九州では三番茶の摘採期に当たる7月18日に台風6号が上陸したが被害は軽微であった。

摘採期は一・二番茶の遅れに伴い、平年よりもやや遅れた。

収量は地域によって増収あるいは減収したところがあり一様ではなかったが、これは本年度の中・下級品の品薄による生産調整が働いたことも関係しているものと思われる。

病虫害の発生は全般的に少なく、害虫ではチャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノナガサビダニが、病害では輪斑病、新梢枯死症の発生が認められた。

九州における主要茶産地の摘採期および10a当たりの生葉収量は第1表に示す通りである。

(野菜・茶業試験場茶栽培部枕崎)

〔 畜 産 〕

1996年2月1日現在の九州・沖縄地域における家畜別飼養頭数および飼養戸数は第1表に示すとおりである。

1. 肉用牛

1996年2月1日の九州・沖縄における肉用牛の飼養頭数は、1,032千頭で前年に比べて若干減少した(対前

年比98.8%)。飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県(318千頭)、宮崎県(246千頭)、熊本県(141千頭)であり、この3県で、九州・沖縄全体の73.0%を占めている。九州・沖縄は肉用牛の中で乳用種の占める割合が最も低い地域であるが、その割合は18.6%(180千頭)で、前年より1.2%増加している。福岡県は例外で、乳用種の頭数が21千頭で62.5%を占めている。

九州・沖縄における肉用牛の用途別飼養割合は、肉用種雌牛の割合が高く、53.1%(548千頭)で、前年よりやや低くなり、飼養頭数は1.4%低下した。肉用種子取り用雌牛飼養頭数の全国に対する九州・沖縄の割合は47.6%であった。一方、九州・沖縄の肉用種肥育牛は306千頭で、全国比では38.1%である。九州・沖縄地域は依然、子牛生産基地としての性格が強いが、肥育基地および牛肉供給基地として益々重要になっている。

九州・沖縄における肉用牛飼養農家戸数は、1996年2月1日で、67,600戸であり、前年より6,030戸減少し(-8.2%)、従来からの減少傾向が続いている。1戸当たり平均飼養頭数は、飼養農家戸数の減少に伴って増加し、15.3頭で、前年より1.1頭増加した。全国の1戸当たり平均飼養頭数は18.7頭であり、九州・沖縄地域の飼養規模は全国よりも小さいが、この地域で繁殖雌牛飼育経営が多いことによるものである。

各畜種とも飼養戸数および飼養者は、飼養者の高齢化と後継者不足に加え、畜産物価格の低迷等により小規模飼養者を中心に飼養中止が続いている。肉用種の減少は、子取り飼養農家戸数減によるところが大きい。

肉用牛に関する研究では、肉質改善のためのビタミンAと肉質との関連、肉用牛改良情報システムの普及で雌牛の期待育種価の導入、高品質牛肉生産のための、超音波診断装置による肉質の早期判定技術、および良質牛肉生産のための飼養管理技術の開発が各県で進められている。また、受精卵移植(胚移植)による乳用種から肉用種子牛の生産、双子生産技術、胚分割、受精胚の雌雄判別、核移植に関する研究などが精力的に実施されている。

2. 乳用牛

1996年2月1日現在の九州・沖縄における乳用牛の飼養頭数は187千頭で、前年より1,800頭減少(前年比98.9%)した。九州・沖縄地域で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、熊本県(57.5千頭)、福岡県(27.6千頭)、

宮崎県(26.4千頭)であった。九州・沖縄での頭数は、長崎県を除いて減少した。全国では、192.7万頭と前年比98.8%と同様に減少した。

1996年2月1日現在の九州・沖縄における乳用牛飼養農家戸数は、4,550戸で、前年より160戸減少(-3.2%)した。九州・沖縄における飼養農家1戸当たりの飼養頭数は、40.6頭で、前年より0.4頭の増加であった。九州・沖縄の1戸当たり飼養頭数は、全国平均頭数(46.3頭)より少ないが、北海道、東海地域に次ぐ頭数規模となっている。

飼養戸数の減少は、飼養者の高齢化と後継者不足に加え、子牛価格等の低迷から、小規模の飼養者を中心に飼養中止があった。また、収益性を向上させるために高能力牛への転換や交雑種の生産および受精卵移植による和牛生産等により、飼養頭数が減少した。

飲用牛乳の消費量は横ばい傾向にあるが、乳製品の消費拡大により牛乳の生産量は増加している。しかし、飲用向け乳価の引き下げ、飼料価格の高騰など酪農経営は厳しい状況が依然続いており、牛乳生産の一層の低コスト化が必要である。そのためには、自給飼料生産基盤の拡大、飼養管理の省力化およびふん尿処理の効率化等の諸問題を解決する必要がある、そのための技術開発が急がれる。

乳用牛に関する研究については、夏期における乳量・乳質低下防止のための研究、フリーストール・ミルクングパーラー方式の導入に関し、周辺技術の研究が各県で精力的に進められている。

3. 豚

1996年2月1日現在の九州・沖縄における飼養頭数は319.5万頭で、前年に比べ6.4万頭減少(-2.0%)した。九州・沖縄で飼養頭数の多い上位2県は前年同様、鹿児島県(133.2万頭)、宮崎県(74.2万頭)であり、これら2県で、九州・沖縄の飼養頭数の64.9%を占めているが、全県で減少した。

飼養農家戸数は、全国で16,000戸、九州で4,800戸で、中小規模が減少したのに対し、大規模農家は増加した。九州・沖縄での1戸当たり飼養頭数は665.6頭(前年比+10.1%)となった。特に飼養規模の大きな県は鹿児島県(938頭)、大分県(736頭)で、これらの県は前年も上位を占めた県である。

第1表 家畜飼養頭羽数および飼養農家戸数(1996年2月1日現在)

	肉用牛	乳用牛	豚	採卵鶏	ブロイラー
飼養頭数	290.1万 (-2.2%)	192.7万 (-1.2%)	970.0万 (-3.4%)	14,554万 (-0.7%)	118,134万 (-2.3%)
	九州・沖縄 103.2万 (-1.2%)	18.7万 (-1.1%)	319.5万 (-2.0%)	3,538万 (-4.0%)	4,999万 (-0.9%)
農家戸数	154.9千 (-8.7%)	41.6千 (-6.1%)	16.0千 (-14.9%)	6,800 (-7.0%)	3,607 (-6.4%)
	九州・沖縄 67.6千 (-8.2%)	4.6千 (-3.2%)	4.8千 (-11.7%)	1,490 (-8.6%)	1,364 (-5.2%)
1戸当たり頭数	18.7 (+6.9%)	46.3 (+5.3%)	606.3 (+11.2%)	21,403 (+6.5%)	32,751 (+5.4%)
	九州・沖縄 15.3 (+7.5%)	40.6 (+1.1%)	665.6 (+10.1%)	23,745 (+5.0%)	36,650 (+4.6%)

注) a) ()内は対前年比の増減、採卵鶏は300羽以上の飼養戸数。

b) ただし、ブロイラーは九州のみ。

飼養戸数の減少は、飼養者の高齢化と後継者不足および都市部を中心にふん尿処理等による環境問題での飼養中止に加え、輸入食肉の急増による先行き不安からの飼養中止等による。

九州各県では品質の優れた銘柄豚を生産するために、系統豚の造成を進めているが、さらに、これらの系統豚の組み合わせ試験が行われている。また、糞尿処理技術、糞尿中の窒素等の環境負荷物質低減、清浄豚生産による慢性疾病の防止技術に関する研究等が実施されている。

4. 採卵鶏

1996年2月1日現在の九州・沖縄における飼養羽数(種鶏を除く)は3,538万羽で前年に比べて147万羽の減少(-4.0%)した。飼養羽数の多い県は、鹿児島県(1,074万羽)、宮崎県(652万羽)、福岡県(599万羽)で、これらの3県で、九州・沖縄の全飼養羽数の65.7%を占めた。

九州・沖縄での飼養戸数(成鶏雌300羽以上の戸数のみ)は1,490戸で、前年に比べて140戸の減少(-8.6%)した。1戸当たりの成雌飼養羽数は23,745羽と前年に比べて5.0%増加した。1戸当たりの羽数は宮崎県(29,618羽)、鹿児島県(29,038羽)が多い。

飼養戸数の減少は、飼養者の高齢化と後継者不足および配合飼料価格の引き上げによる先行き不安からの飼養中止等による。飼養羽数の減少は、小規模飼養者の飼養中止や、卵価回復のため、飼養者が自主的に減羽したためである。

5. ブロイラー

1996年2月1日現在の九州の飼養羽数は4,999万羽で、前年に比べて43万羽(-0.91%)減であった。全国の飼養羽数に対する九州での飼養羽数割合は42.3%で非常に高い。九州では、鹿児島県(1,924万羽)、宮崎県(1,765万羽)の両県における飼養羽数が飛び抜けて多く、この両県で九州の全飼養羽数の73.8%である。

九州における飼養戸数は1,364戸で、前年に比べ75戸減少した。1戸当たりの飼養羽数は36,650羽で、前年に比べて1,612羽増加した。1戸当たりの飼養羽数の多い県は、鹿児島県(44,600羽)、宮崎県(35,600羽)である。

ブロイラーの出荷羽数は年々減少しているが、これらの減少は輸入量の増加、飼養者の高齢化、後継者不足などの影響に加えて小・中規模階層での飼養中止および大規模階層での生産抑制が行われたためである。

(九州農業試験場畜産部)

〔飼料作物〕

1. 作付面積

1996年の九州地域における飼料作物の作付面積は牧草類(イネ科・マメ科の永年生、1年生を含む)が71,020ha、トウモロコシが23,900ha、ソルガム類が16,200ha、青刈えん麦が6,000haであり、総計で約11.7万haであった。総作付面積は前年に比べ約4,000ha減少しており、作物別では前年と比較して牧草類が2,600ha減(-2.0%)、トウモロコシが420ha減(-1.0%)、ソルガム類が700ha減(-4.0%)、青刈えん麦が350ha減(-1.0%)であった。飼料作物作付面積の減少は畜産農家の労力不足および円高による、輸入飼料の割安によるものとみられる。

2. 作況

1996年夏は梅雨期の日照不足はあったが、夏は平年並みの気候であり、収量も平年並みであった。

牧草：イタリアンライグラスを中心とするイネ科牧草の収量は6,680kg/10aで作況指数(対平年比)101とほぼ平年並みであった。沖縄県の牧草は12,600kg/10a、作況指数95とやや減収となった。一方、寒地型永年生を中心とするイネ科・マメ科混播草地は3,770kg/10a、作況指数99と平年並みであった。

トウモロコシ：収量5,270kg/10a、作況指数94とやや減収となった。

ソルガム類：九州地域(沖縄を除く)の収量6,880kg/10a、作況指数99と平年並みであった。

青刈えん麦：長崎、熊本、宮崎、鹿児島各県において、それぞれ収量4,350 3,740 2,620 3,960kg/10a、作況指数100, 105, 100, 102で平年並みであった。

(九州農業試験場草地部)

1996年の主要飼料作物の作付面積と収量

	牧 草		トウモロコシ		ソルガム		青刈えん麦	
	ha	t	ha	t	ha	t	ha	t
福 岡	2,220	139,500	354	18,500	702	54,100	—	—
佐 賀	1,390	99,100	187	9,130	642	41,200	—	—
長 崎	5,010	271,500	1,130	57,300	2,310	152,200	694	30,100
熊 本	13,900	671,800	6,580	322,100	1,990	140,700	324	12,100
大 分	6,310	315,100	1,670	98,000	851	65,200	—	—
宮 崎	17,400	1,142,000	8,060	418,300	5,730	373,000	1,060	27,800
鹿 児 島	20,200	1,416,000	5,890	335,100	3,910	281,900	3,870	153,300
沖 縄	4,620	582,100	17	1,090	75	6,990	—	—

注) 農林水産統計速報8-274 (農林水産省統計情報部, 平成8年12月) による。牧草の大部分と青刈えん麦は1995年秋播き・翌年収穫、トウモロコシとソルガムは1996年播種・収穫。

〔養 蚕〕

1. 概 況

九州・沖縄地方における1996年の養蚕農家数は510戸、飼育箱数は6,000箱、取繭量は202tで、前年よりそれぞれ46.5%、53.1%、52.4%減少した。

この減少は養蚕従事者の高齢化、後継者不安など構造的要因に加えて長引く繭価の低迷、繭取引の混乱の影響が残ったためと思われる。

2. 作 況

桑の生育は、春蚕期は4～5月の低温と一部晩霜による凍霜害で伸長が遅れ、収量は7～30%劣った。夏蚕期は熊本、宮崎県では好天に恵まれ平年並みか増収したが大分、鹿児島県では春の低温が影響し、枝条の伸長・収量ともに劣った。初秋蚕期は宮崎県では生育、収量、葉質ともに良好であったが、鹿児島県では初期生育の遅延から伸長が劣った。なお、熊本、鹿児島県では8月中旬の台風12号の影響で葉ずれ、倒伏による葉質の低下がみられた。晩秋蚕期は気象条件に恵まれ、各県ともに収量は多めであったが、地域によっては害虫発生により葉質が低下した。晩々秋蚕期は全体的に生育、葉質とも良好であった。

蚕作は、春蚕期では作柄、繭質ともに比較的良好であった。夏・初秋蚕期は高温のため繭がやや小粒となり、膿・軟化病が散発した。また、上簇時の雨天により繭の解じょ率が低下した。晩秋蚕期は全体的に作柄、繭質ともに良好であった。晩々秋蚕期においても作柄、繭質ともに比較的良好であった。

なお、本年の気象災害、病害などによる被害は、繭換算で14.8tで、その内訳は桑関係が31.1%、育蚕関係が68.9%であり、中でも桑の気象災害が29.7%、蚕の軟化病45.3%、膿病14.9%等の被害率が高かった。繭生産全体に対する被害率は4.9%であった。

(鹿児島県蚕業試験場)

1996年 養蚕農家数、桑園面積、取繭量

県別	農家数 戸	桑園 面積 ha	播立 箱数 百箱	取繭量 t	前年との比較		
					戸数 %	面積 %	取繭量 %
全 国	7,890	19,300	872	3,020	58	73	56
九 州	510	665	60	202	53	62	52
福 岡	—	1	—	—	—	—	—
佐 賀	—	4	—	—	—	—	—
長 崎	X	33	0	1	—	—	—
熊 本	170	293	18	59	63	76	62
大 分	70	109	8	29	62	74	70
宮 崎	70	64	8	25	51	49	47
鹿児島	180	131	21	73	71	72	65
沖 縄	20	30	5	15	51	61	42

注) 農林水産統計速報8-230：平成8年10月30日公表，農林水産統計速報8-280：平成8年12月24日公表により作成。